

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本理化学協会

(代表者 上村 礼子 会員数 約12,000人)

T E L 03-3944-3290

「物理基礎」

1 前文

ここに記した意見は、共通テスト「物理基礎」本試験について、日本理化学協会各都道府県支部から寄せられた248件のアンケート回答に基づき、日本理化学協会大学入試問題検討委員会物理部会によって検討されたものである。

検討は、(1)問題の難易度、(2)問題の設問数、(3)出題の形式、(4)出題分野のバランス、(5)難易度が高過ぎると思われる問題、(6)難易度が低過ぎると思われる問題、(7)学力を見るのによい問題に分類して行い、次年度以降の要望も合わせてまとめた。検討結果と意見を以下に示す。アンケートの回答数は昨年度の共通テストの回答数157件より大幅に増加したこと、回答内容からも共通テストへの関心の高さがうかがえる。

アンケート調査の集計結果(%)		令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度
(1) 問題の難易度	やや難しい	12	7	10	22	4
	適当である	81	77	84	74	75
	やや易しい	7	16	6	4	21
(2) 問題の設問数	やや多い	3	2	7	4	3
	適切である	94	94	92	95	92
	やや少ない	3	4	1	1	5
(3) 問題の形式	適切である	93	99	96	99	98
	適切ではない	7	1	4	1	2
(4) 分野のバランス	とれている	87	93	85	95	88
	とれていない	13	7	15	5	12

出題割合(%)	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度
力学	24	52	44	40	40
熱とエネルギー	36	8	8	30	24
波動	8	8	32	16	8
電気	32	24	16	8	20
原子	0	0	0	6	8
その他	0	0	8	0	0
平均点	30.40	28.19	28.72	24.78	34.68
標準偏差	10.35	9.65	12.29	10.56	11.26
受験者数	19,395	17,978	17,949	18,379	18,486

平均点は34.68点で、昨年度の24.78点より大幅に上がった。標準偏差(得点のばらつき)は11.26と昨年の10.56とほぼ同じであるといえる。問題の難易度については、「やや易しい」という回答は21%で昨年度の4%から大幅に増加した。平均点も共通テストが始まって以来の最高点と

なったことから、今年度はやや易しいという印象がある。

問題の設問数については、「適切である」という回答が 92%であり、出題分野については「バランスがとれている」という回答が 88%となり、昨年度の 95%から減少した。形式については 98%が適切であるという回答であった。

全般に基本的・標準的な問題が多いが、思考力をはかる問題もあり難しい印象があるものの現役の高校生がふだんの授業をしっかり受けていれば正答を得ることができる適当な難易度となっている。共通テスト「物理基礎」の作成方針である、「物理学の基本的な概念や原理・法則の理解を見る、科学的に探究を進める過程についての理解を見る」問題として適切であったと評価する。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

(1) 問題の難易度について

共通テストの平均点は 34.68 点で、昨年度の平均点 24.78 点から 9.9 点高くなった。難易度についてのアンケートでは、「やや易しい」という回答が 21%となり、昨年度の 4%から大幅に増加した。「適当である」が 75%で昨年の 74%と同程度であるが、「やや難しい」という回答は 4%で、昨年度の 22%から大幅に減少した。平均点も高くなっていることから、今年度は昨年度に比べて易しいという印象がある。

(2) 問題の設問数について

大問数で 3 題、小問数で 13 問、設問（解答）数で 14 であり、設問数は昨年度の設問（解答）数 15 から微減した。設問数については、「適切である」が 92%、「やや多い」が 3%、「やや少ない」が 5%であった。おおむね適度な設問数であったといえる。

(3) 出題の形式について

出題の形式については、「適切である」98%、「適切ではない」2%であった。会話形式の出題があったが、問題文はおおむね適度な長さとなっており、受験者が問題の設定条件を読み解くのに時間がかかり過ぎないように配慮されているものの、会話形式にする必要があったのかという意見もあった。数値計算については、選択肢の数値が工夫されており、物理の力をはかるのに適切であった。基本問題を中心としたよい出題であるという意見が多かった。

(4) 出題分野のバランス・配点について

配点を加味した出題割合は、「力学」40%、「熱とエネルギー」24%、「波動」8%、「電気」20%、「原子」8%となっている。今年度は波動分野が少なく、力学分野と熱とエネルギー分野が多く出題された。また、今年度もその他（エネルギーとその利用）の分野からの出題はなかった。出題分野のバランスについては、「とれている」88%、「とれていない」12%であった。第 3 問の A と B とともに熱容量と比熱について出題されているので、どちらか一方でもよかったのではないかという意見もあった。また、力学の基本である運動方程式や力学的エネルギー保存則も出題してほしかったという意見もあった。

(5) 試験問題について

第 1 問 力学、電気、原子、波動からなる小問集合である。標準的な問題が多く、努力した受験者が解答できる問題となっている。

問 3 放射線や放射能の強さを表す単位を問う問題。知識の確認問題である。物理基礎として日常生活とのかかわりという点で身に付けてほしい知識であり、よい出題であったという意見がある。会話文にする必要はないのではないかという意見が多かった。

問 4 「ウェーブ」を波動とみなして波の要素を問う問題。身近な題材をもとに波の伝わり方を考察される良問であるという意見が多かった。

第2問 等速直線運動と等加速度直線運動についての実験をもとにした探究活動の問題。実験について丁寧に説明がされており、実験結果のグラフから物理現象を具体的に考えさせる良問であった。スマートフォンを用いることで物理と日常生活との関わりを意識し、力学と電磁気学を関連付けておりよい出題であった。

問1 磁場の強さのグラフで、ピークの幅から台車の速度を読み取る問題。目新しい設定で良問であった。

問2, 問3 磁場の強さの時間変化から運動を推定する問題。記録タイマーを用いた実験の記録テープの打点間隔とは異なり、グラフの横軸は時刻なので読み解くための思考力をみる良問であった。

問4 $v-t$ グラフから台車の加速度を求める問題。新課程で重視される探究の過程について実践的に問うており、グラフの意味の理解度をみる良問であった。選択肢の値も適切であった。

第3問 熱とエネルギーと電気回路の融合問題である。Aは熱平衡と比熱についての問題。Bはジュール熱を利用した比熱の測定の実験をもとにした探究的な出題である。比熱の測定は、実験条件が異なっても多くの学校で行われている。このような観察、実験を出題するのはよい傾向であるという意見が多かった。

A問2 比熱と蒸発熱についての問題。温度変化と状態変化の両方を伴う熱量保存法則の概念の理解度を問うている良問であった。

B問5 試料台の熱容量と試料の比熱についての問題。リード文から実験装置や測定の方法を読み取る読解力が求められている。思考力を問うよい問題であるという意見が多かった。

3 総評・まとめ

今年度の共通テストは、高等学校の授業で行われている実験からの出題、物理が日常生活と結びついていることを意識した出題となっていた。全体に難易度、出題数は適切で、対話形式の出題では読解力にかかわるような長文の問題は出題されず、基礎・基本を問う出題から、探究的活動を基に物理現象を考察する問題もあり、バランスのよい出題であった。共通テストの高等学校教育への影響は大きい。今年度の出題は学習指導要領の目的に沿っており、今後の授業の指針となるものであった。

4 今後の共通テストへの要望

「物理基礎」は、文系の大学を志願する生徒に加えて、物理学の基本的な概念や原理・法則の理解が必要とされる理系の大学を志願する生徒も受験する。各高等学校の状況から見て「物理基礎」は、それ以外の「基礎を付した科目」（「化学基礎」、「生物基礎」及び「地学基礎」）を受験する生徒と比べ、学力の高い生徒が受験していると推測される。こうした生徒が受験する試験としては平均点が高くなることがある。来年度もこの程度の難易度を維持していただきたい。また、対話形式の問は、文章量が多くなる傾向があるので、出題する場合は考慮していただきたい。数値計算については計算が煩雑にならないような工夫をお願いしたい。

今年度の出題は、現役の高校生がふだんの授業をしっかり受けていれば正答を得ることができるものと思われる。このような傾向の出題が継続されることを希望する。

『物理』

1 前文

ここに記した意見は、共通テスト「物理」本試験について、日本理化学協会各都道府県支部より寄せられた 337 件のアンケート回答に基づき、日本理化学協会大学入試問題検討委員会物理部会によって検討されたものである。

検討は、(1)問題の難易度、(2)問題の設問数、(3)出題の形式、(4)出題分野のバランス、(5)難易度が高過ぎると思われる問題、(6)難易度が低過ぎると思われる問題、(7)形式が適切でない問題、(8)学力を見るのに良い問題に分類して行い、次年度以降の要望も合わせてまとめた。検討結果と意見を以下に示す。回答数が昨年度の 203 件から大幅に増加したと回答内容から、今年度の共通テストへの関心の高さがうかがえる。

アンケート調査の集計結果(%)		令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度
(1) 問題の難易度	やや難しい	9	4	6	15	78
	適当である	75	70	84	78	21
	やや易しい	16	26	10	7	1
(2) 問題の設問数	やや多い	5	5	4	17	18
	適切である	85	92	89	82	77
	やや少ない	10	3	7	1	5
(3) 問題の形式	適切である	90	92	92	96	87
	適切ではない	10	8	8	4	13
(4) 分野のバランス	とれている	70	79	85	92	93
	とれていない	30	21	15	8	7

出題割合(%)	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度	令和8年度
力学	35	40	30	35	30
熱とエネルギー	5	5	5	18	18
波動	10	20	30	12	17
電気	30	30	30	30	30
原子	20	5	5	5	5
その他	0	0	0	0	0
平均点	60.72	63.39	62.97	58.96	45.55
標準偏差	19.22	22.72	22.82	22.72	20.24
受験者数	148,585	144,914	142,525	144,761	145,203

平均点は 45.55 点、標準偏差は 20.24 で、昨年度の共通テストと比べると平均点は 13.41 点下がり、得点のばらつき(標準偏差)は減少した。問題の難易度についてのアンケートでは、「やや難しい」という回答が 78%で昨年度の 15%より大幅に増加した。「適当である」という回答は 21%で昨年度の 78%から大幅に減少した。問題の設問数についてのアンケートでは、「適切である」という回答が 77%で昨年度の 82%から微減し、「やや多い」という回答は 18%で昨年度の 17%と同程度であった。出題分野のバランスについては「とれている」という回答が 93%であった。問題の形式については、「適切である」という回答が 87%であった。

今年度は、未知の事物・現象について考察する力を問う問題、数学的手法を活用して探究的に考察する力を問う問題、答えを導くまでに複数のステップが必要な問題が出題されたため難しいという印象をもったようだが、物理学の基本的な概念や原理・法則の理解を見る問題として適切であったと評価する。観察をもとにした出題はあったが実験をもとにした探究的な出題はなかった。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

(1) 問題の難易度について

難易度についてのアンケートは、「やや難しい」が78%、「適当である」が21%、「やや易しい」が1%であった。昨年度と比べると「やや難しい」が15%から78%と大幅に増加し、「適当である」が78%から21%に激減した。

平均点は45.55点で、昨年度が58.96点、一昨年度が62.97点であったことから、今年度は大幅に下がり、共通テストが始まって以来最低点となった。今年度は、かなり難化したと言える。

(2) 問題の設問数について

問題の構成及び分量は、大問で4題、小問で20問、設問（解答）数で22であった。昨年度の共通テストは、大問数で4題、小問数で23問、設問（解答）数で24であったので分量はやや減少した。問題の設問数についてのアンケートは、「適切である」が77%、「やや多い」が18%、「やや少ない」が5%であった。昨年度が、それぞれ82%、17%、1%であったので、ほぼ変化はないと言える。

(3) 出題の形式について

出題の形式についてのアンケートは、「適切である」が87%、「適切ではない」が13%であり、適切な出題であったと言える。

- ① 会話文形式の出題がなく文章量は適切であったが、問題の設定を把握するのに時間がかかるような出題もあった。
- ② 実験を題材とした出題はなかったが、グラフを解析する能力をみる問いは出題されており、探究的な出題になっていることは評価できる。複雑な計算はなく工夫がされていた。身近な題材をもとにした出題はみられなかった。
- ③ 複数の選択肢を組み合わせることで1つの解答を導く「組合せ解答問題」は、今年度は7問、昨年度も7問で設問数は同数であった。「組合せ解答問題」は、生徒の思考の過程を見る上で良い出題である。今年度も「組合せ解答問題」の部分点は設定されなかった。

(4) 出題分野のバランスについて

配点で重み付けをした出題の割合についても「力学」30%、「熱とエネルギー」18%、「波動」17%、「電気」30%、「原子」5%で、全分野から万遍なく出題されており、適切であったと考えられる。出題分野のバランスについてのアンケートは、バランスが「とれている」93%、「とれていない」7%であった。昨年度の本試験は「バランスがとれている」が92%と高評価であったが、今年度も更に評価が上がり、共通テスト始まって以来の高評価となっている。昨年同様に第3問をA、Bと分けたことによって、異なる視点からの出題が可能になったと思われる。

(5) 試験問題について

第1問 波動、電磁気、力学、原子、熱とエネルギーの各分野から出題されている小問集合の問い。第1問としては、難易度がかなり高かったという意見が多かった。

問2 直流若しくは交流の電源で、ランプの他に複数の素子を接続し定常状態の回路について考察する問題。電気回路の基本及び回路素子の性質を定性的に問うており、理解をみるのに良い問いであるという意見が多かった。一方、この分野は学習してから共通テストまでの時

間が短く理解が十分深まっていない受験者も多いため、第1問としては難易度が高過ぎるという意見が多かった。

問3 見かけの重力と浮力についての問題。直線運動の結果を円運動の知識と結び付けて考察する、観察をもとにした探究的な良問であるという意見が多かった。一方、第1問の小問としては、問題の設定を把握するのに時間がかかるため難しいという意見もあった。

問4 コンプトン効果についての問題。運動量保存則をベクトルとして捉える良問であるという意見があった。一方、考察に必要な関係式がすべて設問中に示されており、与えられた式に数値を代入して計算するだけで解答できてしまうため工夫が欲しかったという意見もあった。一方、原子分野は学習の順番が遅く、理解が深まらないまま共通テストを迎えてしまう受験者も多いことから、このような出題方式を望ましいと評価する意見もあった。

問5 気体の内部エネルギーについての問題。単原子分子理想気体の分子運動についての理解について問うており、学力を見るのに良い問題であるという意見がある一方、選択肢(c)の分子の二乗平均速度(根平均二乗速度)と物質量の積という物理量の意味が不明なため、選択肢として適切ではないという意見もあった。選択肢の構成をみれば、部分点があってもよかつたのではないかという意見が多かった。

第2問 ばねで連結された2物体への衝突及び衝突によるばねの振動に関する問題。

問3 重心系からみた2物体への衝突を問う問題。重心の速度を取り上げているが、問題文の丁寧な誘導により基本的な知識と思考力があれば解答でき、本質的な理解が問われる良問であるという意見が多かった。一方、系については教科書では扱っておらず、二次試験用に問題演習をたくさんやった受験者が優位になってしまう傾向があるので、共通テストでは出題してほしくないという意見も多かった。

問4 重心系からみた力学的エネルギー保存則及び運動量保存則についての問題。問3で誘導された重心系の考え方を力学的エネルギーにも適用していくには、重心系を学習したことのない受験者にとっては難しく、丁寧な誘導があってもよかつたのではないかという意見が多かった。重心が動く単振動についての出題は学力を見るのによい問題ではあるが、難易度が高いので、二次試験向きの出題であるという意見が非常に多かった。

第3問 Aは気体の状態変化についての問題、Bは波の干渉についての問題。

A問2 P - V グラフから1サイクルで気体がした仕事を求める問題。マス目の数を数えて P - V グラフの領域の面積を区分求積により求めるという出題であった。しかし、リード文に P - V グラフの面積は気体が外部にする仕事の総和であると記載されているため、マス目を数えるだけの問いになってしまっている。出題方法に工夫が欲しかったという意見が多かった。

B問4 円形波と平面波が強め合う条件を表す式を求める問題。球面波と平面波の干渉であるが、干渉の式の導出方法とその意味を理解していれば解答できるため思考力をみる良問であるという意見が多かった。

第4問 電場や磁場中における荷電粒子の運動についての問題。頻出の設定ではあるが、力学と電磁気学についての理解度をみる良問であるという意見が多かった。

問5 磁場中のローレンツ力による荷電粒子の等速円運動についての問題。等速円運動の式を立てて円運動の半径と荷電粒子の質量との関係を求める。答えを導くまでのステップが多いため、1つの問いとしては難易度が高過ぎるという意見も多かった。思考過程をみるために小問に分けてほしかったという意見もあった。

3 総評・まとめ

学習指導要領では科学的に探究をするための資質・能力の育成を重視しているが、今年度の共通テストでは、実験方法や実験結果を活用する能力、実験をもとに探究する力を見る問いは出題されなかった。身近な題材をもとにした出題もなかった。物理の基本的な概念や原理・法則を正しく理解していれば解答でき、誘導やヒントも多く用意されており探究的な良問もあった。しかし、問題設定の把握に時間がかかる問いや複数のステップを踏む必要がある問いがあった。分量は昨年度に比べて少なくなったにもかかわらず、多いと感じられたと思われる。思考の過程を見るために、小問を設定してもよかったのではないかという意見もあった。教科書に記載のない項目については、受験者の思考を促すような丁寧な説明が欲しかったという意見も多かった。

4 今後の共通テストへの要望

「物理」は、理系の大学を志願する生徒が受験する。各高等学校の状況からみて、学力の高い生徒が「物理」を選択していると推測される。こうした生徒が受験する試験として、今年度の出題は平均点が化学や生物より低く、かなり難しい出題であったといえる。理科の各科目間の平均点に著しい差が生じないように配慮をお願いしたい。また、今年度は実験やその結果をもとにした出題がなく、身近な題材をもとにした出題もなかった。年度によって傾向や難易度が変わらないような配慮もお願いしたい。知識・技能や思考力・判断力・表現力等を新たな場面で発揮できるかを問う問題を作成する場合は、リード文が長くならないような工夫をお願いしたい。数値計算を行う場合も受験者の負担にならない程度の数値にしていきたい。共通テストの出題は高等学校での授業へ大きな影響を与える。今後も、現役の高校生が普段の授業をしっかり受けていれば正答を得ることができるような基本的な概念や原理・法則の理解の程度をはかる問いや、探究の過程を重視する問いを中心に出题されることを希望する。

原子分野は、学習の順番が遅いため、共通テストまでの期間が短くなり理解を深められないままテストの時期を迎えることが多い。したがって今後も、原子分野からの出題は小問集合の中で1問程度にしていきたい。

② 日本物理教育学会

(代表者 新田 英雄 会員数 約1,000人)

TEL 03-3816-6207

「物理基礎」

1 前文

「物理基礎」は、高校理科における必修科目の一部に位置づけられ、共通テストの「物理基礎」の問題は、この点を踏まえ、多種多様な志望を持つ大学受験者にとっての、高校理科の根幹部分としての基礎的な学習成果が問われる問題である。この点に関しては、大学入試センターウェブページの「大学入学共通テストの仕組み・運営」の冒頭部分に、「大学入学共通テストは、大学に入学を志願する者の高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的とするものであり、(後略)」と明記されていることと合致している。今年度も、この認識に立ち、望ましい問題形態と内容について、本学会会員に対するアンケート調査結果を基に検討を行った。

(1) 回答者の属性

今年度のアンケート調査も昨年度と同じく 구글フォームを用いる方法で行い、昨年度と同じ人数である会員 66 名から回答を得た。回答者の年齢分布及び所属等を表 1 と表 2 に示す。年齢分布は昨年度よりも高齢側に少しシフトしている。また、所属等の「その他」には、高校や大学の退職教員が含まれている。

表 1 年齢分布

年代	①~34	②35~44	③45~54	④55~64	⑤65~
人数	10	9	12	19	16

表 2 所属等(「高校」は、中高一貫校を含む。「セ行」は、「教育センター/教育行政」の略である。)

分類	①国大	②私大	③短大	④高専	⑤高校	⑥セ行	⑦小中	⑧企業	⑨学生	その他
人数	5	4	0	0	45	2	0	2	2	6

(2) アンケート回答集計結果

今年度のアンケート調査の項目は、昨年度と同じである。先に各問の「難易度」「優劣度」について回答を求めた。続いて、問題全体への評価として、「問題の量」,「出題分野の偏り」,教科書レベルの学習を行った高校生に対しての「難易度」「平均点の予想」「自然理解・科学的自然観育成への貢献度」,「観察実験による科学的探究能力・態度の育成への貢献度」,「主体的・対話的で深い学びへの授業改善への貢献度」及び「総合評価(優良度)」について、回答を求めた。その結果を表 3~9 に示す。また、全体の難易度と総合評価は、10 年間の変化を表 10 と表 11 にまとめた。

表 3 問題量

問題量 (N=66)		
	人数	割合(%)
多すぎる	0	0.0
やや多い	7	10.6
適量	58	87.9
やや少ない	1	1.5
少なすぎる	0	0.0

表 4 分野の偏り

出題分野 (N=66)		
	人数	割合(%)
偏りが大きい	9	13.6
特に問題はない	56	84.8
大変適切である	1	1.5

表 5 分野の増減

出題分野の改善意見 (%) N=66			
	出題を増やす	出題を減らす	無回答
(1)運動とエネルギー	7.6	3.0	89.4
(2)物理現象とエネルギー	4.5	4.5	90.9

表 6 各問及び全体の難易度

各問および全体の難易度 (%) N=66					
	易	やや易	適当	やや難	難
第1問	1.5	21.2	71.2	6.1	0.0
第2問	4.5	9.1	68.2	18.2	0.0
第3問A	0.0	13.6	77.3	9.1	0.0
第3問B	1.5	7.6	62.1	27.3	1.5
全体	1.5	18.2	68.2	12.1	0.0

表 7 各問の優劣度

各問題の優劣度 (%) N=66					
	劣	やや劣	普通	やや優	優
第1問	0.0	1.5	80.3	15.2	3.0
第2問	1.5	7.6	47.0	37.9	6.1
第3問A	0.0	7.6	72.7	16.7	3.0
第3問B	3.0	13.6	57.6	19.7	6.1

表 8 平均点の予想

平均点予想 (N=66)		
	人数	割合(%)
~27	3	4.5
28~32	16	24.2
33~37	41	62.1
38~42	5	7.6
43~	1	1.5

表 9 観点別及び総合評価

観点別および総合評価 (%) N=66					
	劣	やや劣	普通	やや優	優
自然観	0.0	15.2	62.1	21.2	1.5
観察実験	0.0	7.6	40.9	48.5	3.0
深い学び	3.0	15.2	68.2	12.1	1.5
総合評価	0.0	6.1	66.7	25.8	1.5

表 10 全体の難易度の10年間の変化

年	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026
全体	適当 61%	適当 59%	適当 65%	適当 73%	適当 60%	適当 64%	適当 66%	適当 62%	適当・ やや難 55%・ 42%	適当 68.2%
高校関係	適当 61%	適当 57%	適当 59%	適当 69%	適当 50%	適当 62%	適当 65%	適当 60%	適当・ やや難 54%・ 42%	適当 66.7%
大学高専	適当 69%	適当 72%	適当 100%	適当 79%	適当 92%	適当 63%	適当 63%	適当 70%	適当・ やや難 44%・ 56%	適当 88.9%

表 11 総合評価の10年間の変化

年	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026
全体	普通 60%	普通 59%	普通 43%	普通 59%	普通・ やや優 39% ・49%	普通・ やや優 42% ・42%	普通・ やや優 55% ・27%	普通・ やや優 44% ・38%	普通・ やや優 53% ・35%	普通 66.7%
高校関係	普通 69%	普通 70%	普通 53%	普通 62%	普通・ やや優 42% ・48%	普通・ やや優 38% ・44%	普通・ やや優 44% ・35%	普通・ やや優 43% ・40%	普通・ やや優 54% ・31%	普通 64.4%
大学高専	普通 46%	普通 50%	やや優 100%	普通 57%	普通・ やや優 33% ・58%	普通・ やや優 75% ・13%	普通・ やや優 74% ・21%	普通・ やや優 60% ・10%	普通・ やや優 56% ・44%	普通 66.7%

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

(1) 問題量・分野のバランス

問題量については、「適量」が 88% (65%/括弧内は昨年度, 以下同様) と最多回答となった。昨年まで、「適量」は 3 年間減少し続けていたが, 今年度は大きく持ち直した。

「分野の偏り」については、「問題なし」が 85% (86%) と昨年度とほぼ同じである。

問題量も分野も適切と評価されたと言えよう。

(2) 難易度

「適当」とする回答が 68% (55%), 「やや難」が 12% (42%), 「やや易」が 18% (0%) であった。「適当」の割合はこの 6 年間で最多であり, 「やや難」と「やや易」もほぼ同程度であることを考えると, 今回の問題は共通テストに切り替わってから最も高く評価されたと言えよう。

(3) 平均点

アンケート回答における予想平均点については, 「28~32 点」は 24% (47%), 「33~37 点」が 62% (30%) と最多回答である。昨年度よりも平均点を高く予想していて, 実際の平均点も 34.68 と予想通り昨年度よりも高くなった。

(4) 学習効果への貢献度

「自然理解・科学的自然観育成への貢献度」については, 「普通」とする回答が 62% (52%, 44%/括弧内は左が昨年度, 右が一昨年度, 以下同様), 「やや優+優」23% (33%, 43%), 「やや劣+劣」15% (15%, 13%) であった。「観察実験による科学的探究能力・態度の育成への貢献度」については, 「普通」とする回答が 41% (41%, 30%), 「やや優+優」52% (53%, 60%), 「やや劣+劣」は 8% (6%, 10%) であった。

「自然理解・科学的自然観育成への貢献度」は, この 3 年間にわたって「やや優+優」が減り続け, 「普通」が増えている。「観察実験による科学的探究能力・態度の育成への貢献度」は, 「やや優+優」が減り「普通」が増えた昨年度とほぼ同じである。「普通」よりも「やや優+優」が多いのは, 実験を題材としているからであろう。

(5) 主体的・対話的で深い学びへの授業改善への貢献度

「普通」とする回答が, 68% (64%, 46%), 「やや優+優」14% (20%, 35%), 「やや劣+劣」18% (17%, 19%) であった。今年度も「普通」が最多回答で昨年度よりも増えたが, 「やや優+優」が減少した結果である。

(6) 問題の総合評価

総合評価については, 「普通」67% (53%, 44%), 「やや優+優」27% (38%, 44%), 「やや劣+劣」6% (9%, 11%) という結果である。昨年度よりも「やや優+優」と「やや劣+劣」が減り, 「普通」が増えている。

自由記述の意見は, 肯定的なものが多かった。基礎をしっかりと学んだ受験者がきちんと得点できる構成になっている点や, 台車と磁石を用いた実験を題材にした問題では, 会話文を用いず, 物理現象を率直に説明する内容になっており, 誘導が丁寧にされている点が好意的に評価されている。一方, 否定的な意見としては, 文系の受験者にとってもやさしすぎるという意見もあり, 計算が中心となってしまっていて, 物理現象の理解を問うような場面が少ないとの指摘があった。また, 会話文など不必要な長文はなくなったものの, 問題文自体は依然として長く, 短い時間で解く問題である特性上, 状況設定の説明に長文を必要とするような問題はふさわしくないとの指摘もあった。また, 出題分野の偏りが大きく, 運動の法則や力学的エネルギーといった, 物理基礎の内容としては多くを占めている範囲の出題が小問を含めて一切なかったことを問題視する意

見もあった。

(7) 各問について

表6に示したように、各問の難易度はどれも最多回答は「適当」である。また、表7に示したように、各大問の優劣度は、「普通」が最多回答であるが、第2問は「やや優+優」が昨年度より増えて44%ある。自由記述の意見をまとめると以下のとおりである。

第1問 全体としては基本事項を理解しているかを確認している問題であり、分野に偏りもなく適切な出題だったという評価ができるだろう。特に、問2で単位を問うている点は、受験者に学んだ物理量がどのような意味をもった量で、その単位は何かを意識しながら学習することを求めていると考えられるため、教育的にも良い出題だったという声が多かった。一方、評価が大きく割れたのは問4で、実演可能であり興味関心を高めるので良い問題であるという意見もあったが、ウェーブは物理的な波動現象とは異なり、誤った理解を誘発する危険性があるので題材として不適切であるという指摘も複数みられた。

第2問 運動に関する基本的な理解ができているかを確認していて難易度に無理がなく、かつ実験を題材とした出題である点で評価が高かった。実際に実験することを想定したときに、電磁誘導の影響は無視するという条件設定に無理があるなどの懸念が幾つか挙げられたが、全体的には適切な問題であったという意見が多数を占めた。

第3問A 熱の単元で理解してほしいことを素直に問うた、良い問題だったと評価されている。水が全て蒸発するときの熱の移動を、本当に問題文のとおり扱って良いのかという点での疑義を唱える声もあったが、問題文に単純化して考えるという注釈があり、しっかり読めば出題の意図どおりに考えること自体には無理はなかったといえるだろう。

第3問B 設定が面白かつ思考力を問うていて良かったという評価と、状況が複雑で説明文も長いため文系の受験者には難しすぎるという意見に分かれた。また、問題の装置は冒頭の説明にある抵抗値の温度依存性（これ自体は物理基礎の範囲を超える）を利用した温度測定器であるが、その特性とは無関係な点のみを問うた出題であった。このため、シンプルとは言えないこの装置をわざわざ問題として取り上げることへの妥当性についても疑義があった。

3 総評・まとめ

問題の量や難易度という点では適当であったといえる。「自然理解・科学的自然観育成への貢献度」や総合評価は「普通」が多いが、受験者の大半が文系であること、そして物理基礎が30分の試験であることを考えると、「普通」であることは、悪い評価とは限らない。より探究的な問題にしようとするれば、状況設定の説明に長文を必要とすることになり、受験者は問題の読解に時間を取られる。また、30分で解けるためには、自ずと問題数に制限がかかり、結果として出題分野も偏ることになる。

出題分野の偏りは、アンケートでは大きな問題はないという回答が多かったものの、教科書でページが多く割かれている運動の法則や力学的エネルギーについて出題されていないことの妥当性には疑義がある。

「物理基礎」は標準単位数2単位と時間的制約が大きく、現場では幅広い内容を教えながら、各々の物理現象について、実験観察などを通じて本質的な理解をさせるような授業づくりに大変苦慮しているのが現状である。

4 今後の共通テストへの要望

来年度以降も、過度な対話形式の問題が出題されないようにしていただきたい。

また、一昨年度の意見書では以下を要望した。

問題作成方針にある「日常生活や社会との関連を考慮」することや「身近な課題等について科学的に探究する問題」を検討することそれ自体は歓迎するが、その方針のために、出題分野が偏り受験者にとって成績が実力ではなく運に左右される結果となったり、今後身近なテーマが「ネタ切れ」となり無理をした出題がされたりすることが懸念される。

結局のところ、これも 30 分という試験時間と問題作成方針との関係から生じる懸念である。問題作成方針の見直しも必要だろう。

今年度「物理基礎」は、昨年度よりも平均点が 9.9 点高くなった。これが「科目による受験者層の能力の違いが、平均点に適切に反映されること」を毎年希望してきた結果であるならば有り難いが、生物基礎に比べるとまだ低い。科目（出題範囲）による受験者層の能力の違いは、他教科の成績を比較することで推定可能であろうから、引き続き、受験者層の能力の違いが平均点に適切に反映されるよう作問をお願いしたい。

共通テストは、高校における今後の「物理基礎」の授業内容をはじめとした、中等教育現場の学習や指導の方向に極めて大きな影響力を持つ。「情報 I」の試験もあり、受験者の負担は大きくなっている。そもそも 30 分の短時間で解く問題で科学的探究を問うのは難しく出題分野も限られるのではないかという疑義もある。大学入学共通テストとしての全体のバランスを見ながら、無理に探究的な問題展開にせず、現象や条件の考察を通じて、基礎的な理解の程度を評価することを重視するように、問題作成方針の見直しをお願いしたい。

『物理』

1 前文

共通テストの「物理」の問題は、多種多様な進路志望を持つ大学受験者に対して、高校における「物理」の基礎的な学習成果を問うものとして位置付けられると認識している。この点に関しては、大学入試センターウェブページの「大学入学共通テストの仕組み・運営」の冒頭部分に、「大学入学共通テストは、大学に入学を志願する者の高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的とするものであり、(後略)」と明記されていることと合致している。今年度も、この認識に立ち、望ましい問題形態と内容について、例年に準じた本学会会員に対するアンケート調査結果をもとに検討を行った。

(1) 回答者の属性

今年度のアンケート調査も昨年度と同じくグーグルフォームを用いる方法で行い、昨年より 2 名多い会員 89 名からの回答を得た。回答者の年齢分布および所属等を表 1 と表 2 に示す。年齢分布は昨年度と比べ 45～54 歳が少し減り、若年側と高齢側がそれぞれ増えた。所属は昨年度と比べ大きな変化はない。

表 1 年齢分布

年代	①～34	②35～44	③45～54	④55～64	⑤65～
人数	13	18	16	23	19

表 2 所属等（「高校」は、中高一貫校を含む。「セ行」は、「教育センター／教育行政」の略である。）

分類	①国大	②私大	③短大	④高専	⑤高校	⑥セ行	⑦小中	⑧企業	⑨学生	その他
人数	8	3	0	0	63	2	1	2	2	8

(2) アンケート回答集計結果

アンケート調査の項目は、例年どおりである。先に各問の「難易度」「優劣度」について回答を求めた。続いて、問題全体への評価として、「問題の量」、「出題分野の偏り」、教科書レベルの学習を行った高校生に対しての「難易度」、「平均点の予想」、「自然理解・科学的自然観育成への貢献度」、「観察実験による科学的探究能力・態度の育成への貢献度」、「主体的・対話的で深い学びへの授業改善への貢献度」及び「総合評価（優良度）」について、回答を求めた。その結果を表 3～9 に示す。また、全体の難易度と総合評価は、10 年間の変化を表 10 と表 11 にまとめた。

表 3 問題量

問題量 (N=89)		
	人数	割合(%)
多すぎる	18	20.2
やや多い	44	49.4
適量	24	27.0
やや少ない	2	2.2
少なすぎる	1	1.1

表 4 分野の偏り

出題分野 (N=89)		
	人数	割合(%)
偏りが大きい	3	3.4
特に問題はない	77	86.5
大変適切である	9	10.1

表 5 分野の増減

出題分野の改善意見 (%) N=89			
	出題を増やす	出題を減らす	無回答
力学	0	0	100
熱力学	0	0	100
波動	0	0	100
電気・磁気	0	0	100
原子	1.1	1.1	97.7

表 6 各問及び全体の難易度

各問および全体の難易度 (%) N=89					
	易	やや易	適当	やや難	難
第1問	0.0	0.0	33.7	55.1	11.2
第2問	0.0	1.1	24.7	57.3	16.9
第3問A	1.1	3.4	69.7	22.5	3.4
第3問B	0.0	2.2	39.3	44.9	13.5
第4問	0.0	1.1	33.7	44.9	20.2
全体	0.0	1.1	7.9	51.7	39.3

表 7 各問の優劣度

各問題の優劣度 (%) N=89					
	劣	やや劣	普通	やや優	優
第1問	6.7	19.1	38.2	31.5	4.5
第2問	10.1	24.7	44.9	18.0	2.2
第3問A	3.4	12.4	52.8	29.2	2.2
第3問B	10.1	10.1	39.3	37.1	3.4
第4問	5.6	20.2	42.7	28.1	3.4

表 8 平均点の予想

平均点予想 (N=89)		
	人数	割合(%)
~54	66	74.2
55~64	20	22.5
65~74	3	3.4
75~84	0	0.0
85~	0	0.0

表 9 総合評価

観点別および総合評価 (%) N=89					
	劣	やや劣	普通	やや優	優
自然観	11.2	21.3	41.6	20.2	5.6
観察実験	18.0	40.4	25.8	12.4	3.4
深い学び	18.0	34.8	36.0	9.0	2.2
総合評価	13.5	40.4	25.8	16.9	3.4

表 10 全体の難易度の 10 年間の変化

年	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026
全体	適当 65%	適当 72%	適当 63%	適当 70%	やや難 ・適当 48% ・44%	適当 68%	適当 71%	適当 65%	適当 58%	やや難 ・難 52% ・39%
高校関係	適当 67%	適当 66%	適当 74%	適当 69%	やや難 ・適当 47% ・43%	適当 63%	適当 71%	適当 66%	適当 60%	やや難 ・難 44% ・49%
大学高専	適当 60%	適当 79%	やや難 67%	適当 71%	やや難 ・適当 62% ・38%	適当 70%	適当 70%	適当 46%	適当 54%	やや難 ・適当 82% ・9%

表 11 総合評価の 10 年間の変化

年	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026
全体	普通 68%	普通 65%	やや優 37%	普通 52%	普通・ やや優 45% ・41%	普通 46%	やや優 55%	普通 43%	普通 55%	やや劣 40%
高校関係	普通 71%	普通 72%	普通 39%	普通 55%	普通・ やや優 48% ・38%	普通 48%	やや優 51%	普通 42%	普通 60%	やや劣 43%
大学高専	普通 40%	普通 58%	やや優 +優 67%	やや優 43%	普通・ やや優 46% ・46%	普通 50%	やや優 55%	普通 55%	やや優 46%	やや劣 ・普通 36% ・36%

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

(1) 問題量・分野のバランス

問題量については、「適量」が 27% (53%/括弧内は昨年度, 以下同様) と 2 年連続で減少している。今年度最多回答となったのは、「やや多」の 49% である。「多すぎ」も 20% 存在し、「やや多」と「多すぎ」を合わせると 70% となり、問題量は多かったと評価されている。また、適量と回答した人の多くは、訓練された受験者の解答スピードを考慮していると考えられ、じっくりと考察するには時間が短い、すなわち、問題量が多めである傾向は否めない。また、令和 8 年度の「共通テスト問題作成方針」にあるように「(前略) 観察, 実験, 調査の結果などを数学的な手法等を活用して分析し解釈する力を問う問題や、受験者にとって既知ではないものも含めた資料などに示された事物・現象を分析的・総合的に考察する力を問う問題」であれば解くのに時間を要するのは当然である。

「分野の偏り」については、「特に問題ない」及び「大変適切である」が 97% と大勢を占めているが、後述の「各問について」で述べるように、各分野内での題材や設問の内容等について、問題視する意見もある。

(2) 難易度

「適当」とする回答が 8% (58%), 「難」が 39% (1%), 「やや難」が 52% (39%), 「やや易」が 1% (2%), 「易」とする回答は 0% (0%) であった。「難」寄りの「やや難」という評価である。

(3) 平均点

アンケート回答における予想平均点については、「～54 点」74% (3%), 「55～64 点」枠が 23% (82%), 「65～74 点」枠が 3% (16%) と、昨年度よりも下の「～54 点」枠に集中している。実際、今年度の最終集計の平均点は、45.55 点と昨年度の 58.96 点よりも大きく下がっている。2 年連続での低下である。

(4) 学習効果への貢献度

センター試験から共通テストに変わった 2021 年度、大きく変化したのがこの項目であった。「自然理解・科学的自然観育成への貢献度」については、共通テストになった初年度の評価は大きく向上したが、その後はセンター試験最後の年であった 2020 年度とほぼ同じか少し良いという状況であった。しかし、今年度は「普通」とする回答が 42% (55%, 46%/括弧内は左が昨年度, 右が一昨年度, 以下同様), 「やや優+優」26% (31%, 41%), 「やや劣+劣」33% (14%, 13%) となり、「普通」が最多回答であるものの、「やや優+優」よりも「やや劣+劣」の方が多く、共通テストになってから最も低い評価となった。なお、センター試験最後の年は、「普通」とする回答が 53%, 「やや優」28%, 「優」0%, 「やや劣」16%, 「劣」3% であったから、それよりも低い評価である。

「観察実験による科学的探究能力・態度の育成への貢献度」については、今年度は「普通」とする回答が 26% (47%, 30%), 「やや優+優」16% (43%, 60%) に対して、「やや劣+劣」58% (10%, 11%) となり、「普通」寄りの「やや劣」という評価である。こちらも、共通テストになってから最も低い評価であるだけでなく、センター試験最後の年よりも低く評価されている。

(5) 主体的・対話的で深い学びへの授業改善への貢献度

今年度は「普通」とする回答が 36% (59%, 51%), 「やや優+優」11% (16%, 41%), 「やや劣+劣」53% (25%, 17%) となった。このアンケート項目は、共通テストに変わったとき

に新設したものであるが、これまでで最も低い評価となっている。

(6) 問題の総合評価

総合評価については、「普通」26% (55%, 43%), 「やや優」17% (28%, 38%), 「優」3% (9%, 7%), 「やや劣」40% (7%, 10%), 「劣」14% (1%, 3%) となり、表7に示した各問の優劣度以上に、低い評価となった。

(7) 各問について

表6に示したように、各大問の難易度は、第3問Aを除き、最多回答は「やや難」である。第3問Aは「適当」が最多回答であるものの、難易の広がりまでみると、「適当」が70%に対して「やや難」が23%と「やや難」に寄っている。また、表7に示したように、各大問の優劣度は、いずれの大問も「普通」が最多回答で「やや優」寄りが多いが、第2問は「やや劣」が25%で、「やや劣」に寄っている。また、他の問題も「やや優」寄りとはいえ、「劣+やや劣」の割合が例年よりも多い。なお、回答者の優劣の判断基準が、必ずしも「共通テストの目的」に準じているわけではなく、むしろ受験者にとって取り組みやすいかどうかが基準になっている可能性が高いことは指摘しておきたい。

各大問についての自由記述を参考に、それぞれ検討を行った。

第1問 優劣度では「普通」が最多回答であるとはいえ、第1問で「劣+やや劣」が26%あることは問題だろう。難易度は「やや難+難」が66%であるのに対し、「易+やや易」は0%である。なんとなくではなくきちんと解こうとすると第1問にしては計算量が多く時間がかかる。小問集合である第1問でこの難易度であるから、動揺した受験者もいたことだろう。なお、原子分野については小問での出題で十分であると過年度の意見で述べてきたが、コンプトン効果は小問で扱うべき題材だとは考えられない。また、問2の「ランプ」という言葉は多くの受験者にとっては聞き慣れない言葉だろう。○に×の電気用図記号は、JISでは確かに「ランプ」となっているが、教科書ではもっぱら白熱電球（豆電球）を表す記号である。受験者にとって聞き慣れない「ランプ」という言葉を用いたことで、無用の混乱や迷いを生じさせた可能性がある。

第2問 難易度は「やや難+難」が74%、優劣度は「劣+やや劣」が35%と、今回の大問の中ではもっとも厳しく評価されていた。難関国公立大学の2次試験を想起させるような問題であり、共通テストとしての出題に疑問を感じるという趣旨のコメントが多数あった。また、問2は、**8**と**9**の配点がそれぞれ5点、計10点であるが、連立方程式を立てて解くため、計算間違いをすると10点失う。ましてや部分点もない。100点満点の試験で、この問題に10点の配点はバランスが悪いと言わざるを得ない。

第3問A 難易度は「適当」が70%と、今回の試験で「適当」が最多回答になった唯一の大問である。問2は、問題作成方針にある「数学的な手法等を活用して分析し解釈する力を問う」問題として出題されたものと推測される。誘導し過ぎていてマスを数えさせるだけに問題になっているという意見もあったが、この程度の誘導は必要だろう。なお、「(前略) サイクルで気体が外部にする仕事の総和」という表現よりも、「1サイクルで外部にする正味の仕事」という表現の方が教科書では一般的である。言葉で迷うことはない方がよいと考える。

第3問B 優劣度では、「やや優+優」が41%と、他の大問に比べて「やや優+優」が最も多かった問題である。その一方「劣」と「やや劣」がどちらも10%あり、否定的な意見もあった。円形波と平面波の干渉という見慣れない問題だが、平面波をはるかかなたから進んできた円形波だと考えられなくもなく、アンケート回答者の意識によって評価が分かれた可能性が高い。

第4問 難易度において、「難」を選んだ人の割合が20%ともっとも高かった問題である。また、優劣度では、「劣+やや劣」が26%、「やや優+優」が32%と意見が割れている。二つの装置が組み合わされた問題で、文章の量も図の数も多い。また計算量が多い問題も含まれている。難関国公立大学の2次試験に近い問題で、共通テストとして適切でないという意見も複数あった。

3 総評・まとめ

今回のアンケート集計とその分析結果からまとめると、令和8年度共通テスト「物理」（本試験）は、全体として、量や難易度は過去の共通テストと比べ、受験者にとって厳しいものとなった。「自然理解・科学的自然観育成への貢献度」や「観察実験による科学的探究能力・態度の育成への貢献度」は、センター試験から共通テストに切り替わってからは、高く評価されることが多かったが、今年度の試験は共通テストになってから一番低い評価になっただけでなく、センター試験最後の年の評価よりも低くなっている。

その理由は、難易度が高いからだろうが、その難易度の高さが、問題作成方針にある「自然の事物・現象の中から本質的な情報を見いだしたり、課題の解決に向けて考察・推論したりすること」に起因するのではなく、難関国公立大学の2次試験に出されるような、学校の授業では扱われないが予備校では扱われるような題材が選ばれていることに起因するからであろう。

昨年度も述べたことだが、10年間の難易度変化を見ると、共通テストになった令和3年度だけが、「やや難」を「普通」が上回っていた。センター試験に比べ、共通テストは難しくなったという評価であったが、その後の共通テストは程度の差はあれどもいずれも「普通」と評価されている。つまり、現在の共通テストもセンター試験と比べれば難しいはずだが、いまの共通テストがもはや「普通」となっているのである。そのような状況にあって、今回の問題の難易度が高いと評価されたという事実は大変重みのあることである。

令和7年度の「問題作成分科会の見解」では、「4 まとめ」として以下のように記されている。

- (1) 教科書に掲載され、授業でも時間をかけて教える基本的な授業内容について問う基礎的問題から、物理的思考力を問う問題までバランス良く出題する。特に、実験・観察や探究の重要性に鑑み、試験として適切な形式で実験等を題材とした問題を作成するように努める。
- (2) 物理に対する興味・関心を高めるために、日常生活に関連した問題が含まれるようにする。
- (3) 平均的な学力を持つ受験者が試験時間60分以内に全ての問題に取り組むことができ、また探究活動や思考力を必要とする問題に十分な時間を割けるよう、問題設定や問題文を分かりやすくする。また問題文が長くなり過ぎないように留意する。
- (4) 設問形式、状況設定、問題文、図などを良く検討し、受験者がじっくり問題を把握できるように配慮する。
- (5) いわゆる連動問題をできるだけ避ける。出題する必要がある場合には、一つの誤答が他に大きく影響しないよう配慮する。
- (6) いわゆる組合せ解答問題では、共通テストから導入された形式での出題となるように配慮する。

今回の共通テストは、ここに挙げられていたことが実現できているとはあまり感じられない問題であった。

4 今後の共通テストへの要望

昨年度述べたことだが、共通テストは「大学に入学を志願する者の高等学校段階における基礎

的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的」とされているのだから、基礎的な問題が出題される試験であるべきであって、各大学の個別学力検査（2次試験）に出題されるような問題であるべきではない。「科学の基本的な概念や原理・法則に関する深い理解を基に、（中略）科学的に探究する過程を重視する。」という共通テストの問題作成方針は、もはや各大学の個別学力検査（2次試験）の出題方針に比肩するものである。共通テストの目的と照らし合わせて、無理に探究的な問題展開にせず、現象や条件の考察を通じて、基礎的な理解の程度を評価することを重視するように、問題作成方針を改めていただきたい。

60分で解き終わる問題量という制約下で、科学的に探究する過程を重視した問題を出題するとなれば、問題数は限られ、どうしても出題分野内における単元は偏ることになる。約14万人が受験する「物理」の試験として、受験者が運に左右されない試験であるべきである。特に、浪人生に比べ準備の時間が限られる現役生にとっては、大きな問題である。

「物理」は高3で履修することが一般的であり、「物理」を標準単位数で設置する学校の多くは、正規の授業ではない「夏期講習」を行ったり、生徒による実験を省略したりするなどして、無理をして全範囲を終わらせるか、生徒が自力で出題範囲の学習を終わらせる、というのが実態である。この点からも、1月に実施される共通テストが2次試験化することは望ましくない。かつての「物理IB」や「物理I」の時代から比べれば、出題範囲も広がっている。

今回も会話文形式の出題がなかったのは良かった。一般的な表現ができるものをわざわざ会話文形式にすることは今後も避けていただきたい。また、いわゆる連動問題をさけると同時に、部分点を設定していただきたい。

センター試験の良かった点を共通テストにも取り入れていただきたい。例えば、受験者が落ちて問題に取り組めるよう、問題の難易度に応じて出題の順を考慮していただきたい。また、作問上の目標平均点を満点の6割にすることもご検討頂きたい。目標平均点が低ければ、それだけ問題の難易のブレが得点に与える影響が相対的に大きくなるからである。

共通テストが「大学に入学を志願する者の高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定する」試験となるよう、今後ご検討いただきたい。